

北陸石仏の会々報

大國神社の不動尊堂

滝本 やすし

石川県小松市茶屋町の梯川右岸に、大國主命を祭神とする大國神社が建てられている。寛永元年に犀之宮社として創建、文政二年に七面大明神を相殿として祀り、明治初頭に大國社と改称、明治十一年に日本武尊を境内末社に祀り、明治二十年に現在の大國神社とした。梯川改修工事による社有地移転に伴い平成十年に現在地に遷座、境内の不動尊堂も新しく建て直された。

不動尊堂の創建は犀之宮社よりも遙かに古く、安徳天皇時代の養和元年と伝えられる。ちょうど源平合戦が行われていた頃である。正平十一年の梯川氾濫によって流されたが、後に再建されている。

祭壇には三基の厨子が並んでおり、中央の厨子に石造の不動明王が、右の厨子に石造の弘法大師、左の厨子に木造の観音が納められている。堂の内壁には不動明王の持物である両刃の剣が施された額が数多く奉納されている。

不動明王は自然石に薄肉彫りされており、片足で岩を踏みつける躍動的な姿である。不動という名にふさわしくない像容と言えよう。お不動様をなでると病気が治ると言われており、石の表面は磨滅して光沢がある。特に眼病平癒のご利益があると言われ、参拝者が後を絶えない。毎年九月二十七日に、富山県小矢部市西町の高野山真言宗慈光院の住職によって護摩供養祭が行われている。



石造不動明王



不動尊堂の内部



石造弘法大師



両刃の剣が施された奉納額

第70号

令和5年8月31日発行

編集と発行

北陸石仏の会

(日本石仏協会北陸支部)

代表 平井一雄

〒939-1315

富山県砺波市太田
1770 尾田武雄方

電話 0763-32-2772

振替 00740-2-11974

(年会費 3000円)

ホームページ

<http://odatakeo.wp.xdomain.jp/>

- ・大國神社の不動尊堂
- ・福井県の庚申塔
- ・森川榮次郎作の石仏
- ・立山町谷口の恵比寿
- ・第64回例会報告
- ・第64回例会の感想
- ・第65回例会案内

福井県の庚申塔めぐり

日本石仏協会会員 堀 富子

3月下旬に、現在青面金剛像の初出とされる福井県永平寺町松岡湯谷神明社の庚申石祠を日本石仏協会会員と調査を行った。

調査にあたり永平寺町教育委員会の方々、北陸石仏の会副会長の滝本やすし氏に多大のご協力を頂きお礼申しあげます。この調査前後に、福井県内所在のごく一部の庚申塔を中心としたフィールドワークを行ったので報告する。

① 神明神社（永平寺町松岡湯谷 五一六一四〇二二）

一九七二年に松岡町教育委員会から出された『松岡町の石造美術』によると、この正保二年（1647）の庚申塔は、「三宝荒神のものとしたが、（中略）青面金剛の姿があらわれる以前の尊像と思われる」と書かれており、日本最古とされる承応二年（1653）神奈川県寒川神社の青面金剛より六年早い造立でありながら、文化財指定にはなっていない。今回はそういった経緯から、松岡町教育委員会の方々や地域の関係者の方、以前に調査された滝本氏と約十名で調査を行った。

石祠は福井県特産の笏谷石を使用し、覆屋があるので状態も良く、前扉の銘文が照明を当てるとはつきりと読める。

正保四年丁亥三月吉日

為現世安穩

ウーン 奉供養庚申三十三年尊像刻彫安置作

後生善取之

土肥勘右衛門

と刻まれている。

石祠の月窓から照明を入れ、日窓は手がすっぽり入る大きさなので、スマホで撮影することが出来た。庚申塔は、石祠の奥壁に三面四臂の青面金剛、



三邪鬼、二猿が彫られている。青面金剛は切れ長の目元、口から牙が出ており、三面とも同じ険しい表情になっている。それに対して、足元にある三邪鬼も珍しい。

その表情も一般的な踏まれて苦しそうな表情の邪鬼とは違い、両手を前で揃え、礼儀正しく、おとなしい表現である。二猿はそれらと違って、顔の表現は見えないが、青面金剛に向けて合掌しているようで、右に配されている猿の足元が少し前に出ている箇所は、表現豊かな庚申塔初期の片鱗が伺える。全体的な印象は、寒川神社と同じく三尊形式の構図となっており、後年に見られる猛々しい表現もあるが、彫りが荒く、平面的にも思える。ただ同時期の寒川神社にある青面金剛と比較すると、細部まで表現しようとする意気込みを感じた。

② 前山庚申堂（同住所） 隅丸型 明暦三年（1657）

前山庚申堂へ行く途中民家の敷地に石棒があり、これは庚申堂再建の際、堂の下から見つかったとのこと。

石棒から前山庚申堂のある「天王山」とよばれる山を登っていくと、普段なら草が生い茂る道なき道だが、我々が調査を行う前に整備して下さり、ありがたかった。またその途中には「是庚申ノ地ナリ 宝永二年七月」（1705）とある、ひざ下ぐらいの大きさの石標が建てられていた。





前山庚申堂は、天王山山中にあり、堂の手前にあった狛犬も土肥氏によって建立され、庚申塔は笏谷石で作られたものである。庚申堂には「猿田彦大明神 庚申堂」と書かれた木札が掛かり、日月、一面二臂の青面金剛、邪鬼、二猿の庚申塔がある。神明神社の庚申塔造立（正保四年）から十年後に造立（わりとすぐ！）なのに、作風がかなり違っているの、きつと石工が違うのである。青面金剛は剣を持った二臂で、足元には邪鬼、その下に二猿が配されている。二猿は、右が片手を口元



に置いているので、不言だと思うが、左の猿の両手は膝に揃え、二匹ともお行儀よく正座している。一面の青面金剛や邪鬼、二猿ともに顔の表情は風化して消えたのか、今ではわからない。

また銘文には、

（右面）口通十口間申之地也 三十三年二當テ御礼ヲ納入

（左面）捧酒事山木ヲ以酒料 替事 干時明曆三丁酉年 土肥氏

とあり、土肥氏が庚申の祀りを行っていたことがわかる史料となっている。一方、神明神社の石祠と前山庚申堂の銘文の一部にある「三十三年」については不明で、仏式法要の節目を意識して造立されたのかもしれない。名前も土肥氏しかないことから、講中ではなく、個人で造立したと思われるが、このあたりは蓮如上人による浄土真宗の影響が大きかったからではないかと教育委員会の方が話されていた。

③ 杉杜白髭神社（福井市勝見二一六） 石燈籠型

神社はJR福井駅の東、足羽川が荒川に分かれた辺りの県道五号線沿いにある。庚申燈籠は、境内の手水舎のすぐ近くに設置され、市の指定文化財になっている。燈籠の火袋に「庚申」銘があり、竿部分に「宝曆十一年辛巳歳九月吉祥日（1762）願主講中」とあり、竿に浮彫されているのは猿かと思いが、手よりも大きいサイズ（結構大きい！）で、表情はない。竿にしがみついている表現が面白い。また三戸が悪事を告げ口するために天へ昇っている様子、という説もあるようだ。



④ 猿ヶ堂 (福井市竹生町) 石祠型 造立年不明

猿ヶ堂は福井四ヶ浦線竹生バス停近くにあり、昭和三十二年七月に建立された自然石の「霊山猿ヶ堂」から、急な階段を上がると遥拝所がある。ここからは道がなく、落ち葉が積もる林の山を登った。急な坂道と足元が落ち葉で滑りやすく、木の枝も左右から飛び出しているの、登るのも一苦労。息を切らせながら山頂に上がると、開かれた場所があり、そこに石祠があった。石祠の前に二猿が、前後にずれて左右に置かれ、小さな耳が頭の上にあつてネズミにも見える。また雌雄になっているのか、右は宝珠を持ち、左は子猿を抱いており、猿の台座にはそれぞれ「奉」「納」と刻まれているが、造立年は不明である。

一方石祠の上に鬼瓦のようなものが正面に置かれ、紙垂も新しい。石祠には頑丈な鍵がかかっている、残念ながら扉を開けて中を拝見することはできなかった。

銘文は扉、石祠内ともに見当たらず、6センチくらいの日窓から覗くと、一面四臂の青面金剛と合掌している二猿が刻まれているのが見えた。こちらも笏谷石で作られており、石祠のおかげで状態は良い。石祠の中は暗いため、月窓から照明を当て、日窓からなんとかスマホのカメラを入れて写真を撮ることが出来た。

青面金剛の髪型は螺髪のようなものになっており、顔も穏やかである。大きな頭のわりに四本の手が細く短いの、当然持っている持物も小さくなっている。まわっている衣も



線刻だけの略された感じなので、全体的に稚拙な感じがしたが、猿ヶ堂は山の中にありながらも、定期的に手入れ、大切にされているのがわかる。

⑤ 加茂神社 (福井市天下町二一五)

神社は福井市の西、猿ヶ堂から志津川を渡って車で5分とかならない山手にあり、庚申堂は社殿右手にある。

庚申塔は笠付角柱、青面金剛一面四臂、二童子、二猿、二鶏で、青面金剛は右手に蛇のようなものを持ち、珍しく猿が直立している。

猿ヶ堂と近いからか、青面金剛の四臂と螺髪髪型、持物などは同じに見えることから、関連性がある印象を受けた。とはいえ、こちらの青面金剛は不動明王のように厳めしい表情で、衣は立体的に彫られ、履物にも模様がある細かな描写となっている。

脇の二童子は今回の初見で、足元に二猿、二鶏を配置し、青面金剛と違ってこれらは線刻のような作りである。

銘文は「元禄二年己巳天令月吉日(1689)仕海」とあるが「仕海」は僧侶の名前か



⑥ 天台宗中道院 (鯖江市長泉寺町二一七―七)

中道院は南北に流れる日野川と福井鉄道福武線との間、市役所の近くであり、天台宗中興の祖として知られる元三大師によって再建された「すりばちやいと」と呼ばれる行事が行われている寺院である。

今回ご住職の許可を得て本堂前にある庚申堂へ入らせていただいた。お堂の中に厨子があり、木像の青面金剛が安置されていた。一面六臂で邪鬼を踏み、厨子横左右に小さな猿のようなものがいくつも並んでいた。

また厨子の横には「防火之仏 庚申」の木札が置かれ、延命や厄除というより、防火除けの祈願をされていたようである。



⑥ 雨乞堂庚申堂 (あわら市滝)

庚申堂は北陸自動車道の金津インター手前にある。

庚申塔の青面金剛は一面六臂と思われるが、剥落しており、銘文や細部はわからない。二猿が正面を向いて左右に正座しているのがなんとも可愛かった。石の状態から当初は路傍に設置されていたと考えられ、銘文がないのが残念である。



⑦ 春日神社 (あわら市沢四二一)

神社は戦国時代の山城であった神宮寺城跡の東、山裾に沿った田畑の細い道沿いにある。石祠は本殿裏にあり、日窓から覗いて見る事ができた。石祠の奥壁には、青面金剛一面六臂、三猿、一鶏が彫られ、青面金剛は左右の手に日月を持ち、三猿は青面金剛の足元に不聞と不見、下の中央に蓮の花があり、不言と一鶏を蓮の左右に配置している珍しいタイプである。青面金剛の表情は大仏のような穏やかさで、身にまとっている衣が鎧のように見えた。

今回見てきた庚申塔でこの三猿は初登場である。一般的には青面金剛の下に三猿が並んで配されているが、これも青面金剛を中心とした三尊形式を意識していたのか、猿の不言を下に置いている。

おわりに

まず日本最古の青面金剛だと思われる神明神社の調査に参加させていただき、貴重な体験が出来た。永平寺町教育委員会、関係者の方々及び石仏協会の諸先輩方に感謝申し上げます。

また今回福井県の一部しか見なかったが、庚申塔の数が少なく、石祠型が多い印象で、青面金剛などの像容が大津絵の影響が大きいのではないかと感じた。

地域によって様々に習合された庚申塔の像容は、奥が深く、私自身まだまだ知識とフィールドワークが少ないと思った。これからも石仏協会の皆さまに教えて頂きながら、見識を広げていきたい。



調査途中、福井市西山光照寺跡にて記念撮影

森川榮次郎作の石仏新知見

尾田 武雄

平成十年十月三日〜十一月八日に、「まなびピア9811」となみ」共催で砺波郷土資料館・砺波石仏の会が主催して「第二十二回郷土先人展 千体の石仏を刻んだ明治の名工 森川榮次郎展」が開催された。砺波地方には石仏の造像が多いが、井波石工や金屋石工の製作したものが多くみられる。その中でも特出してたくさんの石仏制作をした石工は森川榮次郎である。

榮次郎は天保十年（一八三九）砺波郡茶木村（現砺波市茶ノ木）の谷内家に生れた。幼少時に金屋村（現庄川町金屋）の石工榮次郎へ弟子入りし、石工としての腕をかわれ森川家の養子となり、のちに二代目榮次郎を襲名した。その仕事ぶりは実直謹言、無駄なことはなにひとつしやべらず、ひたすら石を彫ることに没頭していたという。

彼の彫った石仏は銘の明らかなものだけでも左記のようである。

- 明治一七年（一八八四） 四六歳 十一面観音像を彫る（庄川町西野）
 一八年（一八八五） 四七歳 十一面観音像を彫る（砺波市秋元観音堂）
 〃年（〃） 〃 不動明王像を彫る（砺波市太田万福寺）
 二二年（一八八九） 五一歳 不動明王像を彫る（砺波市東別所）
 二三年（一八九〇） 五二歳 十一面観音像を彫る（砺波市石丸）
 二七年（一八九四） 五六歳 不動明王像を彫る（砺波市井栗谷）
 二八年（一八九五） 五七歳 不動明王像を彫る（南砺市東城寺八幡社）
 二九年（一八九六） 五八歳 不動明王像を彫る（南砺市沖神明社）
 三一年（一八九八） 六〇歳 十一面観音像を彫る（南砺市今里）
 三二年（一九九九） 六一歳 不動明王像を彫る（庄川町岩黒瓜裂清水）

ここにあげてあるものはすべて一メートル以上の大きなものである。砺波市井栗谷の不動明王像は二四〇センチにも達する。大きな石仏にだけ銘が入っている。これらの他に多くの無記名の聖徳太子像や地藏像があり、一生に

制作した石仏は千体にも達するという。

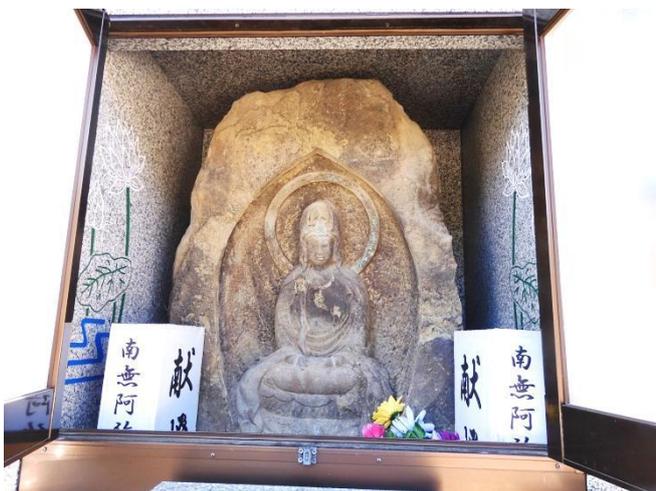
明治三六年（一九〇三）四月五日、家族・弟予たちに惜しまれながら、六五歳の生涯を閉じた。墓碑によると、亡くなる前日に彼の彫った聖徳太子が汗を流しているのを家人が気づき、奇異なことと思っていた。すると翌日、榮次郎は念仏を唱えながら眠るようになって亡くなったという。

彼の彫った石仏は、現在も庄川町はもとより砺波地方に広く分布し、人々の厚い信仰を集めている。一生を信仰に生き、石仏を彫ることでその信仰を人々に広め、なおかつ自分の信心を深めた人であった。墓は「紀元二千五百九十四年八月建之」とあり昭和九年八月に三代目森川榮吉、分家太七、全辰蔵が建立している。

千体の石仏を彫ったとされる榮次郎であるが作者名のある石仏は十体しか確認されていなかった。その後の調査で二体の銘のある石仏を確認したので報告したい。

①阿耨観音（砺波市庄川町小牧）

銘文には「明治十八年九月建之」「彫工森川榮次郎」とある。高さ八十一センチ、幅六十九センチで、やや小ぶりである。明治十八年であるので、榮次郎四十七歳で、砺波市秋元観音堂にある十一面観音、同市太田万福寺の不動明王立像と同時期に造像されている。場所は小牧集落の南部の小堂に安置されている。阿耨観音は珍しく、三十三観音の一つで、姿勢は、岩の上にすわって海を見る姿勢が描かれる。阿耨はサンスクリット語で清涼の池という意味で、ヒマラヤ山中の北側にある想像



上の澄んだ大池で、八功德水（はつくどくすい）で満たされという。水難の禍から救ってくださるという観音として信仰されている。近くには建設当時は東洋一といわれる小牧ダムがある。ちなみに蛇足ではあるが、近くに「明治四辛未 石工井波七次郎」と彫られた大きい釈迦如来坐像がお堂に鎮座している。

②聖観音（砺波市石丸神明宮前）

銘文に「明治二十四年六月中旬建之」「石工森川榮次郎」「世話人若連中」とある。神明宮前のお堂に安置されている。今までお堂に鍵がかかり拝見することができなかった。初めからお堂に入っていたのか、保存状態はすこぶる良好である。

またこの周辺には真宗地帯には珍しい題目塔があり、名号塔、南無釈迦牟尼仏塔や寛政六年の銘が入る丸彫の地藏菩薩坐像がある。



立山町谷口の恵比寿さま

平井 一雄

富山県立山町谷口、旧谷口小学校隣接「忠魂碑」前の池庭（池泉庭園）に恵比寿石像がありました。富山県呉西、小矢部市に一基・砺波市に二基の恵比寿石像の報告がありますが呉東では初めてです。

像容は釣り竿は持たないが烏帽子姿で左脇に鯛を抱えている『増補諸宗佛像』『七福神』の恵比寿像にそっくりです。鯛にはウロコも刻まれています。

常願寺川石工を調べておられる富山石文化研究所代表の古川友明さんは文献・伝承はないが常願寺川石工の牧喜右衛門の作風がある。台座などに銘文はないか詳しく調べて見たいといわれました。



北陸石仏の会第64回例会報告

―富山県上新川郡大庄村と太田村の石仏めぐり―

宮内 七生

五月二十八日に行われた今回の例会では、富山市南部旧大山町地域（上滝駅周辺）の石仏を巡りました。この地域は常願寺川と（下流で神通川と合流する）熊野川に挟まれた扇状地で、かつては常願寺川の氾濫や安政五年の地震に伴う大洪水、疫病の流行などにより度々被害を受けており、多くの水神塔や供養塔が建てられました。また、立山へ向かう旧立山街道筋にも多数の石仏が安置され、今回の見学会でも多種多様な石仏を見ることができました。

初めに向かった花崎の共同墓地には地藏像や六道供養塔が、続いて訪れた花崎十字路付近の路傍には笠付円盤型の准胝観音像や五劫思惟阿弥陀像、馬頭観音像など多くの石仏が並んでいました。准胝観音像は円盤の縁に光明真言が彫られ、笠を入れると一メートルを越す立派なもので、馬瀬口村の石工・甚右工門の作であるそうです。断食中の痩せた阿弥陀の姿で、宝蔵菩薩とも称される五劫思惟阿弥陀像は、浄土真宗の門徒が多い富山県で特に多く見られ、旧大山町地域内でも立山街道沿いを中心に数基確認されています。木造の阿弥陀如来座像もお堂の中に安置されていました。

小原屋公民館近くの路傍に地藏像、如意輪観音像があり、付近のお堂には木造の麻耶夫人像が納められています。この像は夫人の脇から釈迦が誕生した場面が表現され、富山市指定文化財になっています。

田島公民館横には如意輪観音像と地藏像が納められたお堂の隣に笠付円盤型庚申塔が建てられています。続いて訪れた善名の勝光寺跡には、地藏像、聖観音像、如意輪観音像のほか、「六十六部供養塔」や三十基ほどの墓標などが集められていました。勝光寺は明治三年の富山藩合寺令によって光厳寺に合併され、明治十二年には復興したものの昭和後期に廃寺となったそうです。善名の准胝庵跡には現在、小さいお堂が建てられており、長年荒廃して

たそうですが、近年整備されたようです。この周辺には、金剛界大日如来座像が彫られた三界万霊塔、霊場供養法華塔、大乘妙典塔、地藏像、長谷式十一面観音像、無縫塔など数多くの石造物が集められています。そのうちの一基である光背型庚申塔には「寛保三」年の銘が刻まれていることから、造立年が刻まれているものの中では富山県内で四番目に古い庚申塔と言われています。現在、勝光寺も准胝庵も往時の姿は見られませんが、今も多くの石仏や墓標が残っていて、現代に至るまで大切に守り継がれてきたことが分かります。

下番公民館の裏手には、笠付円盤型で三如来（右から阿弥陀如来、金剛界大日如来、釈迦如来）が並ぶ石造物や自然石の文字塔「不動明王尊」など複数の石仏が並んでいます。この地域では数少ない氷見の藪田石でつくられた半跏地藏像は本来、神社の御神体として崇められていたと考えられています。その後は西番の個人宅に許可をいただいて伺い、笠付角柱型の堅牢地神像と不動明王像を拝観しました。洪水の被害を度々受けていた地域で、所有者が家を建てる際に建てたそうですが、全国的に見ても地神の石造物は珍しいそうです。

続いて、西番の路傍にある道祖神の文字塔や巨大な笠付円盤型庚申塔、地藏像の三基を訪れ、その後は西番北口バス停の近くの観音堂を拝観しました。管理者の方から許可をいただいて中に入らせていただきましたが、かつて常願寺川近くの旧街道（立山街道）沿いに並べられていた石仏をこのお堂に集めたそうで、木造の釈迦如来座像と木造の弘法大師像、そして三十九体の西國三十三か所観音などの石仏が安置されています。

西番の中村神明社の近くのお堂には十体の石仏が納められており、中央の箱型の石塔には難陀龍王と跋難陀龍王に捧げられている准胝観音像が精緻に彫られています。その隣には三十基ほどの中世石造物群があり、異なる年代につくられた一石五輪塔などの中世墓を見ることが出来ます。

城村では近年廃寺となった東陽庵の隅の祠に石造の火天像が納められており、元は立山街道の路傍に安置されていたそうです。最後に訪れたのは石屋

の省山寺で、かつてあった清源寺が富山へ移転した後に建てられた寺で、近年無住となったようです。近くの小祠には木造の牛頭天王と石造の火天像が納められており、全国的に見ても火天の石造物が少ない中、近隣に二体の火天像の作例があることはとても珍しいそうです。今回の例会を通して、旧大山町地域内で多く見られた円盤型の大きな石仏は、今まで私が見てきた舟形の観音像や阿弥陀像、庚申塔などと異なり、装飾的でダイナミックな作風がとても印象的でした。

私自身は初めて例会に参加させていただきましたが、この日は天候に恵まれ、春のあたたかな陽気の中で散策することができました。今回は大山歴史民俗研究会の会員の方や東京からの参加者があり、総勢十四名が参加されました。普段なかなか立ち入れない場所にもお伺いすることができて、細やかに彫り込まれた立派な石仏や木造彫刻などを見学させていただきました。案内してくださった滝本さんに分かりやすく説明いただき、大変勉強になりました。貴重な機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。



城村東陽庵の火天



西番の准胝観音



西番旧道沿いの石仏前にて記念撮影



花崎の
五劫思惟阿弥陀



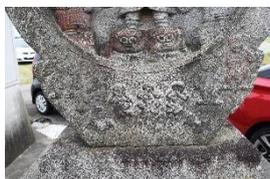
西番鉄心寺の
鎮宅不動



石屋省山寺の
火天



善名勝光寺跡の
地藏



善名の庚申塔の三猿に雌雄

朝早くからの車での見学会なのでたくさんの方の石仏を見ることができました。日本石仏協会では、江戸時代が主でしたから、対象が現代を含むことに驚きました。東京に帰ってきて見学会をまとめたところ、いくつかの面白いことに気が付きました。それは、錫杖を左手で持つ地藏、青面金剛の三猿の座り方が中央の猿は、あぐら、両脇は、女座りする猿が彫られていました。雌雄の違いを示す像は、珍しくないが今回の彫り方で雌雄の区別をしたのははじめてである。これは、明治以降ではないかと考えるが。はじめてみた石仏は、断食修行中の阿弥陀でやせており、五劫思惟阿弥陀と言うようだ。石仏に金泥を塗るのもはじめてみた。鎮宅不動・火天もはじめてみた。

北陸石仏の会第64回例会の感想

大久保修

北陸石仏の会 第65回例会

— 金沢市の不動明王めぐり —

令和5年10月15日(日)

参加費：2500円（ガソリン代、資料代等）

集合場所：①JR砺波駅南口……………7時30分

②IR東金沢駅東口……………8時10分

申込方法：次の事項を記入の上、ハガキでご連絡ください。

住所、氏名、電話番号(携帯電話も)、集合場所

※集合場所および時間が不都合な方はご連絡下さい。

※感染対策を行い、乗用車に相乗りします。

申込先：〒939-1315 砺波市太田1770 尾田武雄方 北陸石仏の会事務局

締め切り：令和5年9月29日(金)

案内：滝本やすし(石川県金沢市)

見学予定

- ◎金沢市柳橋町 市杵嶋神社
- ◎金沢市鳴和町 鳴和滝不動尊
- ◎金沢市常盤町 常盤滝不動尊
- ◎金沢市宝町 馬坂不動尊
- ◎金沢市大桑新町 大桑不動尊
- ◎金沢市法島町 法島不動尊
- ◎金沢市清川町 清川不動尊
- ◎金沢市寺町1丁目 浄土宗永福寺
- ◎金沢市寺町3丁目 日蓮宗善隆寺
- ◎金沢市長田3丁目 三尊ヶ池不動尊
- ◎金沢市円光寺2丁目 曹洞宗覚心院



善隆寺の線刻不動明王

諸事情により見学先を変更する場合があります。ご了承ください。

令和5年度の会費を未納の方は同封の振替用紙にて納めてください。年会費は3000円です。